ボナヴェントゥラの権威理論

中世思想の変容をみる美学の原点

横道 仁志

本発表では、一説の権威論文頴、ボナヴェントゥラ（1220-1274）の思想の中で権威（La autoridad）という概念がどの様な役割を果たしているかという視点から、キリスト教思想と美学の接点について考察する。中世思想史の領域では一般的に、ボナヴェントゥラは或る種の反知性主義者のたる評価を与えてくる。『Aen. Libert.』の彼の発言の理由は「理性的権威に従属しなければならない」という彼の発言(140)にある。ボナヴェントゥラは、理性的に否定し得るため、彼の権威理論は、現代で言えば「例外事態」の主張である。この彼の権威理論は、現代で言えば「例外事態」という概念で有名なシュミットの主権理説と、発想において共通するものがある。ボナヴェントゥラは権威という概念を通じて、人間の認識活動を単純な理性の次元でだけはなく、行為遂行の次元でも思考しようとしている。この事実は彼の権威理論を言語論の観点から考察することを可能にする。